

## ホワイトヘッドの拳闘詩『ジムナジアッド』

海老澤 豊

十八世紀の英国ではさまざまな民衆娯楽が発展し、フェンシング、片刃剣術、棍棒術、ボクシングなどの格闘技も興行として成立していた。当時の拳闘は「ピュージリズム」と呼ばれ、素手で打ち合うことが通例であったが、絞め技や投げ技も容認されていた。競技者は「プライズ・ファイター」としてリングに立ち、勝者には賞金が与えられた。観客が勝敗について多額の賭けをしたことは言うまでもない。(1)

本論は1741年に行われたジョン・ブロートン対ジョージ・ステイヴンソンの拳闘試合を、叙事詩の文体で諧謔的かつ高らかに歌い上げた、ポール・ホワイトヘッドの疑似英雄詩『ジムナジアッド、すなわち拳闘の試合』を論じる。まずは当時の状況を知るために、二人の高名な格闘技者について触れておきたい。

### 1. 「剣技の巨人」ジェイムズ・フィッグ

オックスフォードシャーのテム出身のジェイムズ・フィッグ (James, Figg, 1684-1734) は、剣術や棒術など総合武術の達人として、英国中にその武名をとどろかせた。また彼はロンドン市内マリルボンに設けた「円形闘技場」で、賞金稼ぎの剣闘士や拳闘士を集めて試合を催し、女性同士の対戦も行われて人気を博した。(2) フィッグの闘技場は格式を誇り、高い階級の人々を集めることができたので、他の闘技場のように熊いじめなどの下賤な見世物が同時に開催されることはなかったという。(3)

フィッグは多くの弟子を養成したが、門下生のひとりジョン・ゴドフリーは、フィッグの印象を「この上なく有能な名手であった反面、自分に對

して棒を向ける人間に対しては、貴賤を問わず容赦しなかった」と記している。(4) またフィッグは興行主としても有能で、弟子たちの能力を知悉した彼のマッチメイクは、常に観客たちを満足させたという。(5)

当代の有名人であったフィッグは多くの文化人と交流があり、ホガースの版画にも何度か登場している。「サザーク・フェア」(“Southwark Fair,” 1733)の一番右側で騎乗し左手にサーベルを構えているのがフィッグである。また連作「放蕩一代記」(“A Rake’s Progress,” 1735)の二枚目で、後方で六尺棒を抱えているのもフィッグとされる。(6)

フィッグが行った数多の勝負において、最大の好敵手はグレイヴサンド出身のパイプ職人ネット・サットンであった。両者の試合を見物した詩人ジョン・バイロム (John Byrom, 1691-1763) は1725年4月14日の日誌に「馬車でフィッグの円形闘技場に行った。(中略) フィッグとサットンが戦った。フィッグは負傷し、大量に出血した。サットンは六尺棒を膝に食らって、足が不自由になった。そのために両者は試合を断念した」と記している。(7)

後にバイロムはこの試合の様子を「気高い防衛術に卓越した二人の名手フィッグ氏とサットン氏の間で行われた技の競い合いに関する即興詩」(“Extempore Verses, Upon a Tryal of Skill between the two Great Masters of the Noble Science of Defence, Messers. Figg and Sutton”)と題した、8行12連の詩に仕立て上げた。(8) 第1連を引こう。

偉大なフィッグは長らく、賞金稼ぎの拳闘士たちに

マリルボンの原で唯一の君主として認められていた。

彼の剛勇は近郷ばかりか遠くの町にまで伝わり、テムズからグレイヴSENDまで川を下って広まった。

そこにパイプ作りを生業とするサットン氏が暮らし、

フィグが実に屈強な剣客であると耳にするや、彼と名声を分かたんと名乗りを上げる決意を固め、テムズの王者に挑戦する書状を送ったのであった。

Long was the great *Figg*, by the prize fighting  
Swains,  
Sole Monarch acknowledg'd of *Marybone* Plains;  
To the Towns, far and near, did his Valour  
extend,  
And swam down the River from *Thame* to *Gravesend*:  
Where liv'd Mr. *Sutton*, Pipe-maker by Trade,  
Who, hearing that *Figg* was thought such a stout  
Blade,  
Resolv'd to put in for a Share of his Fame,  
And so sent to challenge the Champion of *Thame*.  
(11. 1-8)

フィグとサットンはまず剣技を競う。勝利の女神もいずれに加担すべきか決心のつかぬうちに、フィグは脇腹から大量の出血を被る（本人は自損だと主張した）が、サットンも右腕に深手を負う。ここで二人は得物を六尺棒に代えて戦闘を再開し、フィグの強烈な一撃がサットンの膝を破壊して決着がつく。

バイロムはフィグの勝利が最終的にはユピテルの神意によるものとしながらも、二人の剣客を『イーリアス』に登場する古代の英雄と比べて、大いに称賛する。

ヘクトルでさえ、彼の後ろ盾アポロンとともに、サットンと対峙すれば、ああ、棒で手痛く打たれよう。アキレウスも、老母テティスに河に浸けられたが、

フィグと対峙すれば、おお、切り裂かれるであろう。

Were *Hector* himself, with *Apollo* to back him,  
To encounter with *Sutton*,—zooks! how he would  
thwack him!  
Or *Achilles*, tho' old Mother *Thetis* had dipt him.  
With *Figg*—odds my Life! how he would have  
unript him! (11. 85-88)

プライズ・ファイトという卑近な題材を、叙事詩と結びつけながら、高遠かつユーモラスに歌うというバイロムの手法は、後に論じるホワイトヘッドの『ジムナジアッド』に影響を与えたものと推測される。

またモーゼス・ブラウン (Moses Browne, 1707-87) は短詩「円形闘技場の眺め」(“A Survey of the Amphitheatre,” 1736) で、古代ローマの円形闘技場では剣闘士が悲惨な殺し合いをしたり、猛獣相手に命を落としたりしたのに対して、ロンドンの円形闘技場は残酷でないと歌う。(9)

ここに私は座り、殺人を恐れることもない、  
剣戟の柔和な名人たちに混じっていても。  
金を賭け、フィグやストークスを見て笑え、  
みな我らの無害な闘士たちなのだから。

Here may I sit and fear no slaying,  
Mid those meek masters of sword-playing:  
Lay wagers, laugh at *Figg* and *Stokes*,  
And all our harmless fighting folks. (11. 59-62)

ただし当時の拳闘試合は現在のような厳格なルールに縛られていなかった。フィグの弟子ボブ・ウィタカーは、倒れている相手に自分の重い体を投げ出して押しつぶすこと(プロレスというボディプレス)を得意技にしていた。また相手のあごを砕くことで有名だった「ヴェネツィアのゴンドラの船頭」が挑戦してきた際に、フィグはあごをハンマーで叩かれても平気な男としてウィ

タカーを推薦した。だが試合中に形勢不利と見たウィタカーは腹部に隠し持った「英国製の釘」(プロレスでいう凶器)で相手の腿を刺し、結果はウィタカーの勝利に終わった。(10)

## 2. 「ボクサーの頭領」ジョン・ブロートン

フィッグの後に拳闘士として一時代を築いたのは、1730年にテムズ河の手漕ぎボートレースで優勝したジョン(俗称ジャック)・ブロートン(John Broughton, 1705-89)であった。ブロートンはジョージ2世の御前で師匠フィッグと模擬試合を行ったことで、国王衛士に任命された上に、王の息子カンバーランド公爵という強力なパトロンを得る幸運に恵まれた。(11)カンバーランド公爵は、ジャコバイトの蜂起(1745)やカロデンの戦い(1746)で敵を完膚なきまでに叩きのめし、逃亡する兵をも殺戮したことから「屠殺者」なる異名をつけられた人物である。

カンバーランド公爵はブロートンを伴ってベルリンを訪れた際に、立派な体格をしたプロイセン近衛師団を前にして、一つ手合わせをしてみよとお抱えのボクサーに問うた。するとブロートンは合間に食事をとれるならば、連隊全員を相手にしましょうと答えたという。(12)

当時の観戦記を残したゴドフリーは、ブロートンの戦い方を「相手の打撃を歓迎するかのごとく、大胆にしっかりと踏み出し、パンチを両腕で難なく受け止めた。やがて全身の筋肉を隆起させ、体を締めると、腕に全体重を乗せて、杭を打ち込むような力を相手に放つのだ」と記している。(13)

1941年にブロートンがトテナム・コート・ロードの闘技場で、ヨークシャー出身の御者ジョージ・ステイーヴンソンと行った試合が『ジムナジアッド』の題材である。40分に及んだ試合を見物したゴドフリーの記述によれば、当時ブロートンは病気のために準備不足であったが、「真の底力を証明し、その戦いぶりは輝きわたった」という。

打撃の速度こそ上回っていたステイーヴンソンではあったが、ブロートンの「この試合を通じて

放った中で最も強烈な一撃」を食らって、あえなく崩れ落ちた。(14)ミーによれば、ステイーヴンソンはこの試合で2本の肋骨を折り、それが内臓に大きな損傷を与えていた。一ヶ月後にステイーヴンソンは、友人となったブロートンに看取られながら世を去ったという。(15)この記述は類書には見られず、信憑性には疑問も残る。

ステイーヴンソンが試合前にブロートンに出したとされる挑戦状には「俺は今日から一ヶ月後におまえと対戦する。闘技場に姿を見せなければ、おまえは臆病者だ。俺を打ちのめせなければ、おまえはほら吹き野郎だ。俺が打ち負けせば、おまえは死人も同然だ」とある。皮肉なことに、ステイーヴンソンの放言は自分にはね返る結果となったのだ。(16)

ブロートンはこの結果に衝撃を受け、主として闘技者の安全を守るために新たな規則を1743年に設けた。これが「ブロートン・ルール」であり、審判やセコンドの設置、倒れた相手に打撃を加えてはならない、腰や腿をつかんではない、ロー・ブローの禁止などが含まれている。(17)ただし勝者が賞金の3分の2を取り、リング上で公正に分配すべしという規則は、ボクシングが賭博の対象であるとともに、闘技者はファイトマナーのために戦っていたという事実を示している。

このルールは1838年に改訂されるまで百年近く通用していた。新たな「ロンドン・プライズ・リング・ルール」では、試合前に選手の靴とズボンをチェックすることが義務づけられ、ダウンした相手にパンチや蹴りを入れること、頭突き、ロー・ブロー、目つぶし、噛みつき、ボディプレスが禁止された。(18)さらに1867年の「クイーンズベリー・ルール」では、レスリング技(投げ技や絞め技)が禁止され、グローブの着用が義務づけられた。(19)つまりブロートンの時代には、これらの反則技がまかり通っていたということだ。

またブロートンは1743年に「ボクシングという男性的な運動のための円形闘技場を建設するための提案」(“Proposals for Erecting an Amphitheatre for the Manly Exercise of Boxing”)

で、古代ギリシア(特にスパルタ)とローマでは、王侯や貴族が自ら闘技場で戦うことも辞さなかったと述べている。続いてブロートンは、ギリシアやローマの徳を受け継いでいると自負するイギリス人が、彼らを手本として「高潔な闘争」たるボクシングを奨励し、かつては敵に恐怖と屈辱をもたらした英国の闘士の輝かしい精神を復活すべきだと説く。(20)

この「提案」のエピグラムとして掲げられたのは、『アエネーイス』第5巻に描かれたエンテレス対ダレスの拳闘試合の一節である。(21)

戦士たちが互いに繰り出す拳は空を切るが、  
多くはみぞおちを続けざまに打ち、胸に巨大な  
音を立てる。耳とこめかみのまわりをさまよう  
手数が繁く、激しい打撃に頬が弾ける音もする。

(11. 433-6)

ホワイトヘッドは「提案」の1年後に発表した『ジムナジアッド』でこの詩行を模倣しており、ブロートンの「提案」が詩人に靈感を与えたのではないかと推測される。

ブロートンの「提案」には、貴頭階級と大衆の席をはっきりと分けること、闘技者の賞金を厳正に決めること、八百長試合の根絶、そして自分が闘技場の経営と管理にあたることなどが記されている。さらに末尾には「ボクシングの奥義を伝授してほしいと望む者たち」に「真に英国的な技術の理論と実践」を指南するとある。ブロートンは「目のまわりに青あざをこしらえたり、あごの骨を折ったり、鼻血を出したり」するのを防ぐために「マフラー」(一種のグローブ)を考案して、貴頭階級の子弟を集める工夫も怠らなかつた。(22)ただし「マフラー」を着けるのは練習や稽古の際だけで、実戦は素手で打ち合った。

1750年4月11日にブロートンは、ノーフォークの肉屋スラックと対戦し、賭け率は圧倒的にチャンピオン有利であった。しかしスラックが相手の目を狙ってパンチを打ち続けた結果、14分後にはブロートンは両目が見えなくなり、あえなく敗北を

喫した。この試合でカンバーランド公爵は1万ポンドを失い、パトロンに見放されたブロートンは引退し、円形闘技場も閉鎖に追い込まれたという。(23)

蛇足だが、サミュエル・ジョンソンの叔父アンドルーもプライズ・ファイターのひとりで、「スミスフィールドに闘技場を構えていて(選手たちはそこで一年中レスリングやボクシングをしていた)一度も投げられたり負けたりすることがなかった」という。ジョンソン自身も「ボクシングの攻撃や防御の技術にとっても精通して」いたとスロール夫人は記している。(24)

またジョンソンは1773年にヘブリディーズ諸島を旅行した折に、ボズウェルに語っている。(25)

プライズ・ファイティングがなくなったのは残念だ。あらゆる技術が保存されるべきだし、防御術は間違いなく重要なものだ。我が国の兵士たちに剣を持たせておきながら、その使い方を教えないのは馬鹿げたことだ。プライズ・ファイティングのおかげで、人々は自分の血を見ても、傷から少々の痛みを感じても驚かなくなったのだ。重たいクレイモア(両刃の大刀)は扱いにくい武器だったと思う。クレイモアは一振りするのがやっとだった。両手を使わなければならないし、振り回すときとすぐに疲れてしまうに違いない。だから相手がしばらく勝負を引き延ばしさえすれば、相手が勝つに決まっている。私ならロリー・モア(アイルランドの反逆者)の剣に対しては短剣で戦う。短剣で一撃を受け流して、敵に向かって接近することができる。あの重い剣の内側に入り込めば、敵を倒せる。敵はまったく為す術もないまま、こちらは悠々と敵を突き刺すことができるのだ、仔牛相手のように。

### 3. 『ジムナジアッド』

ポール・ホワイトヘッド(Paul Whitehead, 1710-74)の『ジムナジアッドすなわち拳闘試合。実に短いが実に興味深い叙事詩。スクリブレルス・テルティウスの序論と合注付き』(*The Gymnasiad*,

or *Boxing Match. A very short, but very curious Epic Poem. with the Prolegomena of Scriblerus Tertius, and Notes Variorum*, 1744) は、叙事詩の形式や歌いぶりを借りて、些末な題材を高遠な文体で歌う「疑似英雄詩」に分類される。この作品は詩行こそ3巻230行と「実に短い」ものの、献辞、序言および大量の脚注から構成されている。(26)

これは散文と韻文が入り混じったメニッポスの諷刺詩という言うことができ、おそらくはポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『愚物列伝、四巻の詩。1742年に発見された完成稿によって公刊。スクリブレルスの序言と合注付き』(*The Dunciad, in Four Books. Printed according to the complete Copy found in the Year 1742. with the Prolegomena of Scriblerus, and Notes Variorum*, 1743) に倣ったものであろう。(27)

エピグラフとして掲げられたのは、マルティアーリスの第13巻第2エピグラムから、「我々はこれらが無であることを知っている」という、やや自嘲的な句である。この句はミドルトンとデッカー、ウェブスター、ベン・ジョンソンら17世紀の劇作家も序言などで使っている。だがジョン・ゲイが『乞食オペラ』(*Beggar's Opera*, 1728) のエピグラフにこの句を用いたことが、ホワイトヘッドに直接的な影響を及ぼしたと考えられる。(28)

ホワイトヘッドは「最も強力で無敵のジョン・ブロートン氏に」と題した献辞で、ブロートンの「謙遜」と「儉約」と「腕力」を褒める一方で、頭の弱い政治家や物まね猿に似た伊達男に皮肉を飛ばす。さらにホワイトヘッドはブロートンを「アガメムノンの威厳さ、アキレウスの勇気、アイアースの強靱さ、ユリシーズの叡智」を兼ね備えた人物として称賛し、彼を英雄として描くこの作品が『イーリアス』のごとく後世の賛辞を得ることを願う。

続く「スクリブレルス・テルティウスの序論」で、ホワイトヘッドは故意に回りくどい文体を用いて、叙事詩としての『ジムナジアッド』を自己弁護する。この詩は「戦闘、演説、乱暴者、大言

壮語、そして言うまでもなく倫理」といった叙事詩の種々の特徴を備えており、あまりにも短くはいえ、『イーリアス』や『アエネーイス』に劣らず「詩歌の力」に満ちている。さらに『ジムナジアッド』には「真の基準に達した機知、ユーモア、冷やかさ、諷刺、嘲笑」が含まれており、これは先ごろ亡くなった詩人 (ポープを指す) が大いに持ち合わせていたものである。

またボクサーを英雄になぞらえることについて反対意見があるかもしれないが、『イーリアス』第23巻にはエペイウス対エウリュアロスの拳闘試合があり、『アエネーイス』第5巻にもエンテレス対ダレスの拳闘試合が描かれている。主人公は神々や英雄の血を引いていることが叙事詩の常道であるから、著者は船頭たるブロートンをネプトゥースの末裔、御者たるステイーヴンソンをパエトーンの子孫として寓意化した。

このような前置きが延々と続いた後で、ようやく『ジムナジアッド』の詩文が始まる。各巻の冒頭には梗概が示され、詩行の下には膨大な脚注がつけられている。ページによっては脚注が詩行を圧倒するほどの分量で、これは『愚物列伝』と同じである。また拳闘試合の様子が歌われるのは第3巻のみであり、第1巻は試合を観戦しようと押し寄せるロンドンの人々を諷刺まじりで描写し、第2巻では試合前の二人の雄姿が出自とともに語られ、ブロートンの演説で締めくくられる。

冒頭でホワイトヘッドは叙事詩の慣習に倣い、第1巻を詩神への祈願と主題の提示で始める。

歌え、詩神よ、恐ろしい乱闘の競技を歌え、  
あの怖ろしい日の血なまぐさい榮譽を、  
パエトーンの豪胆な息子が (途方も無い名だ)  
海神の子孫に挑んで名声の闘技場上がったのだ。

Sing, sing, O Muse, the dire contested Fray,  
And bloody honours of that dreadful day,  
When *Phaeton's* bold Son (tremendous Name)  
Dar'd *Neptune's* Off-spring to the Lists of Fame,  
(11.1-4)

ホワイトヘッドは「ベントレイデス」なる筆名で3・4行目に注を付し、「ブロートニデス」とか「スティーンソニデス」といった古典的な呼称は音楽的とは言えず、詩人が父親の名前を借りて息子を呼ぶことはよくあることなので、これによって英雄たちの威厳を高める結果になったと述べる。このような学術的かつ無用とも思える注釈は、作品に諧謔と諷刺的な色合いを加えている。

試合当日の朝、さまざまな人々が仕事を投げ出して闘技場へと駆けつける。

まるで巣箱から群れをなす飛行編隊が馥郁たる  
草叢にあふれ出て、春の花の蜜を吸るがごとく、  
各々の法学院から法律家の群れを駆り立てる、  
束になった予想屋や鵝ペンを持った法学生だ。  
議員や肉屋は貯えを全てつぎ込むのだ、  
羊肉を気に掛けるが、法律は気にしない。  
予算法案も、宮廷に従わず、今や待ったがかかり、  
太った仔羊はもう一日めえと鳴く猶予を得る。  
街道筋の盗賊は今や短銃の弾薬を抜き取り、  
弱った馬を休ませ、今日は街道も往來自由だ。

As from their Hive the clust'ring Squadrons pour,  
O'er fragrant Meads to sip the vernal Flow'r;  
So from each Inn the legal Swarms impel,  
Of banded Seers, and Pupils of the Quill.  
Senates and Shambles pour forth all their Store,  
Mindful of Mutton, and of Laws no more;  
E'en Money Bills, uncourtly, now must wait,  
And the fat Lamb has one more Day to bleat.  
The Highway Knight now draws his Pistol's Load,  
Rests his saint Steed, and this Day franks the  
Road. (11. 19-28)

ホワイトヘッドは最初の4行について、知り合いの優れた批評家から法律家を蜜蜂に例えることに異議を唱えられたと注に記している。なぜなら蜜蜂は「勤勉、無害、有益な生物」であるのに対して、これらの属性は一つたりとも法律家には当て

はまらないからで、あえて言えば、巣箱の略奪を糧とする雄蜂が、法律家の原型としてふさわしいという。また引用の後半についてもホワイトヘッドは、試合を見物するために、街道筋の追剥がパンを断念しなければならない一方で、上院議員はただ国事を怠けるだけであるから、追剥の方が私利私欲がないと述べている。

以下の詩行では、闘技場のあるトテナム・コート・ロードに集まるブライズ・ファイターたちを描いている。「デヴェイル」は犯罪者の捕縛に積極的だった当時の治安判事トマス・デヴェイルを指す。彼が居を構えたボウ・ストリートは、後にフィールディング判事率いるボウ・ストリート・ランナーズの拠点となった。(29)

トテナムには喧嘩好きな者たちが大勢いるが、  
デヴェイルの一团に捕縛され、怒れる正義の  
犠牲となり、賞品を眺めることも叶わぬのだ。

There many a martial Son of *Tott'nham* lyes,  
Bound in *Deveilian* Bands, a Sacrifice  
To angry Justice, nor must view the Prize.

(11. 37-9)

この詩行の注釈でホワイトヘッドは「注解学者」なる筆名で、不注意な読者は、円形闘技場は絞首台の温床より少しはましであり、ボクシングと窃盗には何か関連があると考えられるかもしれないと前置きしてから言う。

ボクサーだからといって泥棒であるわけではなく、泥棒であるがゆえにボクサーなのである。このようなごまかしや嘘やはぐらかしは(中略)泥棒という職業と同様に、法律の業務に付随する性質である。だからといって、あらゆる弁護士が泥棒に違いないと誰が推論するだろうか。

これらは諷刺と言えれば諷刺だが、本作品の主題とはほとんど関係がない。ホワイトヘッドは1739年にドヅリーから『行儀、諷刺詩』(*Manners: A*

*Satire*) を出版したが、これが上院の有力者の逆鱗に触れ、著者と出版者の双方が法廷に召喚される事態となった。出頭したドヅリーは1週間の収監という憂き目にあったが、ホワイトヘッドは出頭せずに逃げおせたとする。(30) ともあれ詩人がお偉方に反感を抱いていたことは間違いない。

闘技場に集まった群衆は、鼻負するファイターに金を賭けて、試合の開始を待ち望む。最初に少年たちの模擬戦闘があり、続いて「屈強な鉄の男たち」(the hardy Iron-Race, l. 50) が登場して、敵を倒すための作戦を心の中で巡らせている。先触れが二人の名前を呼ぶところで第1巻は幕となる。

第2巻ではまず御者のスティーヴンソンがリングに上がる。

その表情は猛々しく輝き、内面の激情を物語る、  
彼は柵を跳び越え、闘技場の上で跳ねている。  
屋根は観客の高まっていく歓声で反響し、  
誰もが賛嘆の眼差しで彼を見つめている。

Fierce glow'd his Looks, which spoke his inward  
Rage,  
He leaps the Bar, and bounds upon the Stage.  
The Roofs re-eccho with exulting Cries,  
And all behold him with admiring Eyes.  
(11. 5-8)

注に「ウェルギリウスのダレスの描写を見よ」とあるように、ホワイトヘッドは戦いの場面を描くにあたって、『アエネーイス』第5巻におけるエンテレス対ダレスの拳闘試合を忠実になぞっている。ブロートンは老いてもなお力の衰えないエンテレスに、スティーヴンソンは若く豪胆なダレスに重ね合わされる。『アエネーイス』では、アエネーアスが勝負を止めたことでダレスは生き長らえるが、勝負はエンテレスの勝利に終わる。

ホワイトヘッドはすでに結末を見越してこの詩行を書いており、スティーヴンソンに「不運な若者」(Ill-fated Youth, l. 9) と呼びかける。

どこへ馬を駆ろうと、どの宿も汝の力を認めて、  
女中は一杯の酒を、馬丁は飼葉を持って飛んでくる。  
だが知るがいい、俊敏な馬車を導く技に長けていても、  
汝の敵のように、腕力の戦争に出る者は誰もいない。

Where e'er you drove, each Inn confess'd your Sway,  
Maids brought the Dram, and Ostlers flew with Hay.  
But know, tho' skill'd to guide the rapid Car,  
None wages like thy Foe the manual War.  
(11. 17-20)

続いてブロートンが登場する。ホワイトヘッドはブロートンの肉体が外見上は老いているが、歳月によって疲弊してはいないと述べた上で、彼が若い頃にテムズ河のボートレース (Doggett's Coat and Badge) で優勝したことに触れる。

リングに陣取る観客が年老いた戦士が見た途端に、  
歓びが彼らの胸に溢れ、響きわたる声援が後に続いた。  
その大音声たるや、テムズ河の穏やかな流れで、  
トリトンの若人らに優り、彼が櫓を漕いだ頃に劣らず、  
彼の翼をもったはしけは他を遙かに引き離して、  
喜び溢れる岸に到達し、徽章が正当だと証明したのだ。

Soon as the Ring their ancient Warrior view'd,  
Joy fill'd their Hearts, and thundring Shouts  
ensu'd;  
Loud as when o'er *Thamesis*' gentle Flood,  
Superior with the *Triton* Youths he row'd;  
While far a-head his winged *Wherry* flew,  
Touch'd the glad Shore, and claim'd the *Badge* its  
due.  
(11. 29-34)

続いてブロートンはスティーヴンソンに対して自分の戦歴を誇らしげに語る。「グレットニウス」ことグレッティングは血の海に沈んで、喉の奥から「降参」という運命の言葉を絞り出した。「アレニウス」ことパイプスは地面に手足を伸ばし、嫌々ながら賞金を譲った。ハロー教会の尖塔が見える

ところで倒れた「若者」はジェフリー・バーチであった。理髪師ことジョージ・テイラーも、血を流して犠牲者となった。

ゴドフリーはこれらのボクサーについて寸評を書き残している。グレッティングはボディブローが強烈だったが、胆力に欠けており、パイプスは卓越した技術を持っていたが、体格が小さく腕も短かった。二人はブロートンと何度も対戦したが、放蕩がたたって勝利を得られなかった。またテイラーはブロートン以外のボクサーにはすべて勝利したが、胆力の面で不足していたという。(31)

ブロートンの長い演説が終わると、いよいよ勝負が始まり、第3巻は『アエネーイス』からの引喩を散りばめた戦闘の描写に終始する。たとえばブロートンの老獺さを描く次の詩行をあげよう。

焦れた若者は、名声への希望に鼓舞されて  
最初に腕を伸ばすが、狙いを外してしまう。  
用心深い戦士は、敵の動きをよく観察して、  
上体を反らして、一撃必殺の打撃を避ける。  
視線は逸れたが、その打撃は耳元で音を立て、  
風を切りつつ、虚しい力を宙で無駄にする。

Th' impatient Youth, inspir'd by Hopes of Fame,  
First sped his Arm, unfaithful to its Aim;  
The wary Warrior, watchful of his Foe,  
Bends back, and scapes the death-designing  
Blow;  
With erring Glance it sounded by his Ear,  
And whizzing, spent its idle Force in air.  
(11. 5-10)

これは注に示されているように、『アエネーイス』第5巻における拳闘試合の場面から借用したものである。

…と、相手は頭上からくる強打を機敏に  
見て取るや、すばやい体の動きでかわして逃げた。  
エンテルスは振り出した力が空を切り…  
(11. 444-6)

原典では老いたエンテルスが若いダレスに殴りかかるのに対して、ここではステイーヴンソンの強打をブロートンがかかわすというように、役割が逆になっているが、大筋では原典を外れていないと言ってよかろう。ホワイトヘッドは別の注で、学識ある読者は著者がたびたびウェルギリウスに言及することに気づくであろうが、それがローマ詩人の模倣や翻訳を意図したものでどうかは判じがたいに違いないと述べた後で、「一般的に模倣は悪い翻訳にすぎないし、翻訳は悪い模倣にすぎない」し、いずれにせよ不運に失敗すれば批評家の憎しみを満足させることになろうと記している。ホワイトヘッドの真意を測りかねる文章であるが、彼の伝記を書いたトンプソンは「古典作家たちへの引喩は実にユーモラスで良い出来だ」と評価している。(32)

ところで先にも記したように、当時の拳闘試合では絞め技や投げ技も禁じられてはいなかった。

今や取っ組み合って、双方が接近戦に突入し、  
足と足を締めつけ合い、腕と腕を絡み合わせる。  
二人は汗を流し、肩で息をし、引きつける筋肉を締め、  
ともに櫓のごとく動かず、頑強な胴体を支えている。  
ついに年長なる者がその狡猾な技を披露する、  
腰を浮かせながら、不運な若人を倒した。  
震える手足を宙高く投げつけると、  
嵩のある重荷は地面めがけて投げ落とされる。

Now grappling, both in close Contention join,  
Legs lock in Legs, and Arms in Arms entwine;  
They sweat, they heave, each tugging Nerve they  
strain,  
Both, fix'd as Oaks, their sturdy Trunks  
sustain.  
At length the Chief his wily Art display'd,  
Poiz'd on his Hip the hapless Youth he laid;  
Aloft in Air his quiv'ring Limbs he throw'd,  
Then on the Ground down dash'd the pond'rous Load.  
(11. 23-30)



この描写ではブロートンがどのような技を用いたのか判然としない（プロレスでいう裸締めで相手を持ち上げながら投げ落とした？）が、ゴドフリーの観戦記を引いてみよう。(33)

ブロートンはどんな数学者もこれほど巧みには案出できないような絞め技を相手にかけた。この巧みな絞め技に捕えられて、スティーヴンソンは立ったり倒れたりする力をすっかり奪われてしまった。やがて相手の背中の上で自分の頭を3・4分休めた後で、ブロートンは活力が戻ってくるのが分かった。すると絞め技を解いて、再び対峙した。

この文章から推測すると、ブロートンがスティーヴンソンにかけた技は、プロレスでいう首締め（前屈させた相手の首を上から腕で決める）のように思われるが、いずれにせよ現代のボクシングでは反則技であることは間違いない。

二人は互いにダウンを奪い合い、双方の額は血糊に赤く染まるが、戦闘はなおも激化する。

今や絶え間なく二人は空いた腹部を殴りつけ、互いの胸板に弾む打撃の音が高々と響き渡った。二人の疾走する拳はこめかみのあたりで火照り、力を込めた打撃に顎も砕けんばかりだ。

Incessant now their Hollow Sides they pound,  
Loud on each Breast the bounding Bangs resound;  
Their flying Fists around the Temples glow,  
And the Jaws crackle with the massy Blow.

(11. 63-6)

これも『アエネーイス』第5巻の模倣で、ブロートンが「提案」のエピグラフとして掲げた詩行であることはすでに述べた。

戦士たちが互いに繰り出す拳は空を切るが、多くはみぞおちを続けざまに打ち、胸に巨大な音を立てる。耳とこめかみのまわりをさまよう

手数が繁く、激しい打撃に頬が弾ける音もする。

(11. 433-6)

ついにブロートンの「必殺の一撃が死の刻印を押しした」(A fatal Blow, impress'd the seal of Death, l. 72) 結果、スティーヴンソンはリングに崩れ落ちる。友人たちがふらふらになった彼を助け起こして運ぼうとすると、「潰れた歯と血の固まりが彼の口から転げ落ちた」(Mash'd Teeth and clotted Blood came issuing from his Mouth, l. 82) のであった。ホワイトヘッドはここでも『アエネーイス』第5巻468-71行を模倣している。

勝利を取めたブロートンは「黄金色の賞金の輝きに魅惑されてきたものの、この誇り高い冠はもはや戦闘では掲げまい」(Lur'd by the Lustre of the golden Prize, / No more in Combat this proud Crest shall rise; ll. 87-8) と、まるで引退を宣言するような言葉を残してリングを降り、闘技場には拍手喝采が賞賛の翼に乗って高々と舞い上がる。

すでに述べたように、ブロートンが引退するのは、この試合の9年後にサットンに敗北した後のことである。同様にホワイトヘッドはスティーヴンソンが試合で亡くなったように歌うが、実際に彼が死亡したのは試合後しばらく経ってからのことである。『ジムナジアッド』が出版されたのは、この試合の3年後であるから、ホワイトヘッドはブロートンがまだ現役であり、スティーヴンソンの死んだ時期についても知っていたはずである。詩人は作品の劇的効果を高めるために、細部を粉飾したのであろう。(34)

ところで1777年にホワイトヘッドの伝記を書いたトンプソンは、『ジムナジアッド』が「高名なカンバーランド公爵が熱心に奨励していた、ボクシングという野蛮な慣習を嘲笑するために書かれた」と記している。(35) これを受けてチャマーズも1810年にこの作品を「我々の時代に比べて、当時は一般的に奨励されていなかったとはいえ、大きな人気を博していた、ボクサーたちの野蛮な娯楽に対する正当な諷刺」と評している。(36)

ホワイトヘッドがブロートン対スティーヴンソンの試合を実際に見たかどうかは分からない。だがトンプソンやチャマーズが主張するように、詩人がボクシングの野蛮さを批判しているとは到底思われぬ。『ジムナジアッド』の前半には上院議員や法律家に対する諷刺が見られるが、拳闘試合が始まった後の描写は『アイネーイス』を模倣した詩行が大半を占める。ホワイトヘッドはブロートンとスティーヴンソンを古代の英雄に模して描いており、そこに諷刺や諧謔味は感じられない。

『ジムナジアッド』には「序言」で叙事詩の特徴としてあげられていた「戦闘、演説、乱暴者、大言壮語」が巧みに織り込まれている。「そして言うまでもなく倫理」については該当する詩行が見つからないが、俎上にあげられるべきは二人の英雄的なプライズ・ファイターではなく、仕事もそっこのけにして円形闘技場へ駆けつける貴族や大衆であろう。

『ジムナジアッド』は疑似英雄詩としてばかりでなく、18世紀の英国で盛んに書かれたスポーツを主題にした作品群のひとつとして読むこともできる。コンカネンの『フットボールの試合』(1720)、サマヴィルの『ボウリング・グリーン』(1727)と『ホビノル、田園の遊戯』(1740)、マティソンの『ゴルフ』(1743)、ラブの『クリケット』(1744)などの作品は、当時の民衆娯楽のありさまを生き生きと描き出しているのである。これらの作品については別の機会に論じたい。

## 注

- (1) Kasia Boddy, *Boxing: A Cultural History* (London: Reaktion Books, 2008) 26-9. カシア・ボディ『ボクシングの文化史』稲垣正浩監訳(東洋書房, 2011) 35-8.
- (2) *Dictionary of National Biography*, ed. Leslie Stephen (New York: Macmillan, 1886) 18: 437.
- (3) William Biggs Boulton, *The Amusements of Old London from the 17th to the Beginning of the 19th Century*, 2 vols (1901; Cambridge: Cambridge University Press, 2011) 1: 27.
- (4) John Godfrey, preface, *A Treatise upon the Useful Science of Defence* (London: 1747)
- (5) William Oxberry, *Pancratia, or a History of Pugilism* (London: W. Oxberry, 1812) 31.
- (6) *Hogarth's Graphic Works*, com. Ronald Paulson (London: The Print Room, 1989) 299, 302.
- (7) *The Private Journal and Literary Remains of John Byrom*, ed. Richard Parkinson, 2 vols (Chetham Society, 1865) 1: 117.
- (8) *The Poems of John Byrom*, ed. Adolphus William Ward, 2 vols (Chetham Society, 1894) 1: 49-54.
- (9) *The New Oxford Book of Eighteenth Century Verse*, ed. Roger Lonsdale (Oxford UP, 1984) 290-2.
- (10) Godfrey, 58-60. 小林章夫『ブックエンド—イギリス史の散歩道』(研究社, 1992) 140-51. はこの試合を含めたイギリスのボクシングの歴史を紹介している。
- (11) Sharon Harrow, "Boxing for England: Daniel Mendoza and the Theater of Sport," *British Sporting Literature and Culture in the Long Eighteenth Century*, ed. Sharon Harrow (Farnham: Ashgate Publishing Limited, 2015) 158.
- (12) Hugh Phillips, *Mid-Georgian London: A Topographical and Social Survey of Central and Western London about 1750* (London: Collins, 1964) 228.
- (13) Godfrey, 56.
- (14) Godfrey, 63-4.
- (15) Bob Mee, *Bare Fists: The History of Bare-Knuckle Prize Fighting* (New York: The Overlook Press, 2001) 17. ニコルソンもミーの記述に従っているが、やはり出典を明らかにしていない。Kelly Richard Nicholson, *Hitters*,

- Dancers, and Ring Magicians: Seven Boxers of the Golden Age and Their Challengers* (North Carolina: McFarland & Company, 2011) 11.
- (16) Derek Birley, *Sport and the making of Britain* (Manchester: Manchester UP, 1993) 119.
- (17) Pierce Egan, *Boxiana; or Sketches of Ancient and Modern Pugilism* (London: Sherwood Jones, 1823) 51-2.
- (18) Vincent George Dowling, *Fistian; or the Oracle of the Ring* (London: Wm. Clement, Jun, 1841) 63-6.
- (19) Denis Brailsford, *Bareknuckles: A Social History of Prize-Fighting* (Cambridge: Lutterworth Press, 1988) 161.
- (20) John Broughton, *Proposals for Erecting an Amphitheatre for the Manly Exercise of Boxing* (London, 1743) 1.  
(<http://eighteenthcenturylit.pbworks.com/w/page/101956858/Boxing>)
- (21) Virgil, *Eclogues, Georgics, Aeneid* 1-6, trans. H. R. Fairclough, revised by G. P. Goold (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1999) 500. ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳(京都大学学術出版会, 2001) 214. 『アエネーイス』の引用はこの訳に拠る。
- (22) Julia Allen, *Swimming with Dr Johnson and Mrs Thrale: Sport, Health, and Exercise in eighteenth-century England* (Cambridge: Lutterworth Press, 2012) 68-9.
- (23) Oxberry, 47.
- (24) Hester Lynch Piozzi, *Anecdotes of Samuel Johnson* (Gloucester: Alan Sutton, 1984) 2-3.
- (25) James Boswell, *The Journal of a Tour to the Hebrides*, ed. Peter Levi (Harmondsworth: Penguin, 1984) 296. ジェイムズ・ボズウェル『ヘブリディーズ諸島旅日記』諏訪部仁 他訳(中央大学出版部, 2010) 250-1.
- (26) Paul Whitehead, *The Gymnasiad, or Boxing Match. A very short, but very curious Epic Poem. with the Prolegomena of Scriblerus Tertius, and Notes Variorum* (London: M. Cooper, 1744)
- (27) Alexander Pope, *The Dunciad*, ed. James Sutherland, 3rd ed. (London: Methuen, 1963)
- (28) John Gay, *Dramatic Works*, ed. John Fuller, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1983) 2: 375.
- (29) Anonymous, *Memoirs of the Life and Times, of Sir Thomas Deveil, Knight* (London: M. Cooper, 1748)
- (30) Harry M. Solomon, *The Rise of Robert Dodsley: Creating the New Age of Print* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1996) 70-6.
- (31) Godfrey, 57-8, 61-2.
- (32) Edward Thompson, "The Life of Paul Whitehead," *The Poems and Miscellaneous Compositions of Paul Whitehead* (London: G. Kearsley, 1777) xxiii.
- (33) Godfrey, 63-4.
- (34) ハズリットも「戦い」と題したエッセイの最後で、ステイーヴンソンが試合で死なず、しかもプロートンに勝利していたという挿話を書き残している。William Hazlitt, "The Fight," *Selected Writings*, ed. Ronald Blythe (Harmondsworth: Penguin Books, 1985) 96-7.
- (35) Thompson, xxii.
- (36) Alexander Chalmers, "The Life of Paul Whitehead," *The Works of English Poets, from Chaucer to Cowper*, 21 vols (London: J. Johnson et al, 1810) 16: 201.